（ 様式D－２ ）
（ 別　　紙 ）

令和６年度　海外派遣研究員研究報告書

令和　６年　１０月　１４日

日本大学理事長　　殿
日本大学学長　　殿

所　　属　　芸術学部（芸術研究所）
資格・氏名　　教授　谷村順一

■本報告書の内容を公表することは，了承しております。
□本報告書の内容を公表することは，差し控えください。
※いずれかにチェックし（■）提出すること

令和６年度海外派遣研究員（　短期Ａ　）の研究実績を，下記のとおり報告いたします。

記

１　区　　分　　短期Ａ

２　研究課題

日本国外における文芸同人雑誌の発行状況に関する調査

３　派遣期間　　西暦２０２４年　７月２４日　～　２０２４年　９月１４日

４　派　遣　先　　アメリカ合衆国

５　研究目的

文学を集団でたのしむ短歌俳句結社の延長上にうまれた「文芸同人雑誌」（当研究では「小説」を扱ったもののみを取り扱う）は、近代から戦後日本文学史上、あたらしい書き手の修練と文学の営為を通じた紐帯の場であり、様々な文学的主義や方法を包摂しながらそれらを実践することであらたな潮流を生みだしてきたが、諸外国では「文芸同人雑誌」は、類似物を含めその発行は確認されておらず、「文芸同人雑誌」という出版形態が日本人独自の文学活動＝芸術表現であると推察される。一方、これまで数多くの人々が移民として渡ったハワイでは、移民による日系日本語文学の活動の一環として、新聞、一般の文芸雑誌が発行され、短歌結社、俳句結社を発行元とする短歌、俳句を中心としたいくつかの「同人雑誌」の存在が確認されている。当研究ではビショップ博物館、ハワイ日本文化センターなどに収蔵された資料を精査し、小説を扱った「文芸同人雑誌」の当地での発行状況について調査を行う。

（ 様式D－２ ）

６　研　究　概　要

①　研究の方法

商業出版物が国立国会図書館の納本制度によって収集されている一方で、文芸同人雑誌は、その成り立ちに起因する以下の特性により、体系的な収集がこれまで行われてこなかった。

1.　同人の離合集散により雑誌自体の寿命が短い

2.　国会図書館といった公共機関などへの寄贈が行われていない

以上の理由から同人雑誌全体を網羅するデータベース自体も存在せず、資料として活用されない／することが困難な状況である。また、これらの理由に加えて、プロではない書き手（職業作家以外）による作品や文芸同人雑誌は、いわゆる中央文壇から一段低く見られ、その価値が顧みられることも少なかったため、文芸同人雑誌に関する研究もほとんど行われてこなかった。その結果、現状では「果たして文芸同人雑誌が本当に日本独自のものであるか」という問いに対し、明確な回答もその確証も得られていない。本研究は、「文芸同人雑誌が本当に日本独自のものであるか」を解明することを目的とし、まずは多くの日本人移民が移住したハワイに着目して当地の日系移民の文学活動を調査することで、「同人雑誌活動が日本独自のものである」という説の検証を試みる。具体的には、ハワイにおける日系日本語文学活動を調査対象とし、ビショップ博物館やハワイ日本文化センターなどに収蔵された資料を精査することで、小説を扱う「文芸同人雑誌」の当地での発行状況を明らかにする。

②　渡航先での活動内容

ハワイ日本文化センター、ビショップ博物館を訪問し当関連研究資料の所蔵の有無などについて所蔵リストの精査（オンラインでのデータベース検索含む）を行った。

７　研究結果・成果

①　研究結果

研究目的にも記したとおり、「文芸同人雑誌」は日本国外において類似物を含めその発行が確認されておらず、「文芸同人雑誌」という出版形態が日本人独自の文学活動＝芸術表現であると推察される。しかしこれは勝又浩が「同人雑誌、その消長と伝統と」(『同人誌の変遷』) において指摘したものが唯一のものであり、その他の論拠となる先行論文を現在のところ見つけることができない。これは「文芸同人雑誌」が文学研究における一次資料として存分に利用されてこなかったことを端的に示すひとつの事例であり、「文芸同人雑誌」が素人による出版物であるがため体系的に収蔵されておらず、書誌データが整備されていないなど様々な理由が考えられるが、そもそも「文芸同人雑誌」に対し一般的には文学作品として、また文学研究においては研究資料としての価値が持たれてこなかったことが最大の理由であろう。あるいはこれまで体系的所蔵や書誌データの作成が行われなかったのも「文芸同人雑誌」がそのコストに見合う価値を持ち得ていないものと認識されていたからに他ならない。日系人文学の研究者である篠田左多江による「ハワイ日系日本語文学小史―文芸誌を中心に―」(※1)、「黎明期のハワイ日系日本語文学」(※2)、「ハワイ日系日本語文学小史」(※3) はハワイにおける日系移民の文学活動の先行論文として、本調査においてもっとも有効な資料であり、「ハワイ日系日本語文学小史―文芸誌を中心に―」では 1936 年 12 月にロスアンゼルスで刊行された日本人による「文芸同人雑誌」『收穫』について論じられている。だが篠田も「しかし資料があまり残っていないことから，文芸誌の存在を新聞や本の記載などの 2 次資料から類推しなければならないことも多々あった。」(「ハワイ日系日本語文学小史」　62 頁) と記すとおり、資料所有者の死後、遺品整理人が日本語を理解できず破棄されたこと、あるいは太平洋戦争当時、移民たちがアメリカへの忠誠を示すために敵性とみなされかねない日本語による印刷物などを自らの手で焼却したことなどの理由から現存する資料は極めて少なく、その現物を見つけることは非常に困難な状況である（このことは山本秀行「ハワイにおける日系アメリカ文学の系統的・歴史的研究」(科研費　奨励研究(A)　課題番号 09710343) 1997 年実績報告でも言及されている)。本調査においても 53 日間の調査活動では残念ながらあらたな資料の発見はおろか前述した先行論文に記載されている資料を実際に目にすることも叶わなかった（なにより当地で「文芸同人雑誌」というものを説明し、理解してもらうことが困難を極めたことをここに付記したい)。

②　今後の展望

前述したように本調査をとおし、新資料の発見、および現存する資料の現物に触れることができなかったものの、資料へのアクセスの困難さによって「文芸同人雑誌」の資料的価値が当地においてもこれまでまったくといっていいほど認められていなかったことを再認識することとなった。しかし一方では 4 世、5 世とハワイ日系移民の世代交代が進み、彼／彼女たちの“日系アメリカ人”としてのアイデンティティ（日本本土で暮らす私たちはその外見を含め“日系人＝日本人”と認識するが、実際は当地での移民をめぐる過酷な環境によって彼らの抱くアイデンティティは“日本人移民”をルーツとす

る“日系アメリカ人”であり、私たちとおなじ“日本人”ではない（※4)）が確立されるにあたり “日本人”であった 1 世、2 世による文学活動のひとつである「文芸同人雑誌」が採用され得なかったこと、またハワイ＝アメリカの文学状況において「文芸同人雑誌」「同人」といったシステムが受容されなかったことこそ、「文芸同人雑誌」が日本独自のものであることのひとつの証明となり得るのではないか、と思うに至った。「文芸同人雑誌」という編集、出版システムが当地アメリカの文学状況にとって有効であれば、移民国家アメリカにおけるその他の文化の受容同様、「文芸同人雑誌」もまたアメリカナイズされ、独自の発展を遂げていたはずである（例えば食文化でのハンバーガーやタコスといった料理のアメリカナイズの様子を見れば、多文化受容の貪欲さが確認できよう)。また日本からの距離が近く、数多くの日本の出版物が流通することなどによって日本本土と地続きともいえる状況であるがゆえ、日系人独自の文学の成立が困難であったこと、あるいは当時の主要な文学関係者がロスアンゼルスなどアメリカ本土西海岸に移住したことなど、ハワイにおける日系人の文学活動が低調だったことも当地における「文芸同人雑誌」の消沈の理由と考えられる。ひきつづきハワイでの資料調査を継続し、さらにアメリカ本土西海岸に移住した日系人の文学動向に調査の射程を広げることで、ハワイを含むアメリカにおける日本人ならびに日系人による文学活動状況、および当地での日系人文学受容について明らかになるとともに、「文芸同人雑誌」が日本独自の出版形態であるという推論の検証のひとつの足がかりとなろう。

参考文献

※1 篠田左多江「ハワイ日系日本語文学小史―文芸誌を中心に―」（不二出版、1998 年 https://discovernikkei.org/ja/journal/2011/1/7/shukaku/ 2024 年 10 月 9 日閲覧）

※2 篠田左多江「黎明期のハワイ日系日本語文学」(『移民研究年報』2007 年 3 月）

※3 篠田左多江「ハワイ日系日本語文学小史」(『立命館言語文化研究』』31 巻 1 号 立命館大学国際言語文化研究所 2019 年）

※4 矢口祐人『ハワイの歴史と文化 悲劇と誇りのモザイクの中で』(中公新書 1644 中央公論新社 2002 年 6 月 25 日）

以 上